

<実践報告>

## 世代間交流と外国人留学生教育

北沢 勝親

研究協力員

草野(角尾) 篤子

信州大学教育学部生活科学講座

### Foreign Student Education in Intergenerational Programs

KITAZAWA Katsumi: Japanese Language Instructor, Faculty of Education, Shinshu University

KUSANO-TSUNOH Atsuko: Living Science, Faculty of Education, Shinshu University

I am living in the final stage of my life. When I understand that my time in this world is limited, I have to live each day for the better. I must take every step to grow more in myself. The limit on my time in this world urges me on to do something productive as long as I live. If I practice my life with love, courage, patience, hope, and faith, I will be rewarded by a big consciousness of hope. Though helping and encouraging foreign students in their Japanese language and culture study, loving them, contributing in a positive way to their happiness and welfare, I discover what things are most important to me. My earnest desire is to pass on the younger generations what I have learned from life. Sharing what I have learned from my life with the foreign students, I can make my life higher in quality and my spiritual reward will be great.

【キーワード】 高齢者の自己実現 コミュニケーション英語能力養成を目指す勉強会へ  
プライズム 流汗悟道 異文化理解

#### 1. はじめに

筆者は、現在信大の教育学部と工学部の留学生に現代日本語と現代英語のボランティアの奉仕活動をしている。2000年3月で古希を迎え自分の人生の第三ステージを歩むこととなる。第一の人生では中学・高校の英語教師を勤め、第二の人生では教育学部で一般英語の非常勤講師を勤め、第三の人生では、留学生の言語指導に没頭している。私にとって今がもっとも充実した日々であり、自分の人生の晩節のあたり、ひそかにやがてきたるべき人生の終焉を覚悟しつつ、一日一日を充実して生きることを願って生きている。

#### 2. 言語教育ボランティア

二十一世紀の大学の教育活動の中での新しい試みがボランティア教師の登場であろう。ボランティアは4つの特徴をもつ。第一は、自発性で人から言われてやるのではなく自ら

進んで行うのである。第二は無償性で報酬を期待しないこと。第三は公益性である特定の団体の利益のために働くのではなく全ての人の利益を考慮すること。第四は継続性で一定期間ずっと継続すること。よく、新聞などに一日留学生の運動会とか、持ちつき大会などの記事が出ているが、私はあまりこうした行事は評価しない。全く不必要ではないが、留学生がもっとも望むのは日本の大学で講義や演習に十分対応できる日本語能力をつけることなのであり、この要請には継続性が必要である。私は今毎週月曜日から金曜日まで五日間指導しており一日9:00から4:30、平均5時間の授業を行っている。また一対一の授業を原則としている。ボランティアの喜びは、自分を犠牲にして人に仕えることであり、人は決してパンだけで生きることは出来ないということが実感できることである。だが、ボランティアは、大学行政や経営の旗振り役であってはならないし、自己満足であってはならない。何をしたら留学生は喜ぶのか。留学生の必要は何かを見極めることである。最近の日本の子供がすぐ切れるのは、「与える喜び」がないからだといわれている。戦後54年、経済至上主義と学歴神話で生まれた教育の結果がもたらしたものは、「学級崩壊」やいじめ・不登校生徒の激増という悲惨な状況である。「衣食足りて礼節を知る」という言葉があるが、衣食のみを追い求めた日本人は、その奴隷となりさがり心を悪魔に売り渡してしまったのではないだろうか。「神なき教育は悪魔を作る」という西洋の諺があるが、科学を絶対者とする代替えた戦後の日本の教育は、悪魔の子を作ったのかもしれない。

### 3. 高齢者についての基本的な考え方

#### 3.1 高齢者の人権とマンパワーの活用

高齢者の姥捨て山的な社会風潮を一掃せねばならない。例えば欧米先進諸国では定年制はない。65歳以上でも十分働けるのである。そして経費削減で考えられるのが高齢者OBの活用である。「千葉大学フェロー制度」のアイデアなど評価されよう。筆者の住む団地も高齢社会になってしまい、家にいて時間を持て余している人も多く見受けられる。こうした人たちへの地域社会でのパワーの活用こそ望まれることであろうし両者ともに計り知れない恩恵をもたらすであろう。筆者の近所の小学校では「学習ボランティア」活動の試みがなされようとしている。地域の老人達を遊ばせておくことは地域にとっても大きな損失であろう。

#### 3.2 高齢者を社会から排除してはならない

様々な人々によって構成されている社会の中で、高齢者の持てるパワーや能力を生かせる社会を作っていくかねばならない。21世紀になり、65歳以上の人口が四分の一以上をしめ、少子化減少が続いて、20歳以下の人口が四分の一ぐらいつ減ってしまう社会の到来を考えると「親父狩り」のような高齢者を無用の長物扱いする若者の出現が危惧される。我国の現代社会では若者達の拝金主義や、自己中心のエゴイズム、規制社会の秩序のフレームの中に存在した倫理観、人に対するあたたかい思いやりの心を喪失した若者達が増え

てきている。こうした世代間戦争の社会作りではなくてお互いに高齢者も若者も助け合っ  
て共存していく社会を 21 世紀には作らねばならないと思う。

#### 4 高齢者の自己実現の喜び

高齢者になると喪失体験が増えてくる。いったん病気になるとなかなか回復しない。  
精神的身体的に無理が利かなくなる。だが、高齢者には、過去の蓄積された深い経験と言  
う財産がある。生きている間にこれを若者や後輩達に与えていくことこそ高齢者自身に喜  
びと生き甲斐を与えるものである。筆者の場合は、留学生や研究者達の日本語や彼らの日  
本語論文などを助けることにより日々計り知れない喜びと生きる力を与えられている。文  
部省留学生の中国の英語教師である趙燕燕の現行の中国教育の改革の中心である「素質教  
育」について、「国が教師の待遇を改善し社会的地位を高める。それに応えて教師は社会に  
奉仕すること。教師という職業を選んだ時点で、奉仕ということがその人の人生に深くか  
かわって来ること」などを彼女は論文で述べている。また人間学的運動学を専攻する  
王長紅の毎晩午前一時迄修士論文の執筆に取り組む姿は涙ぐましいものがある。

#### 5. 米国人短期留学生と信大生との交流

1998 年から信州大学と姉妹提携しているユタ大学で日本語を学んでいる学生が教育学部  
で一ヶ月間長野市にホームステイしながら日本語・日本文化を学ぶ夏季集中講座が始まり  
国際交流委員会が窓口になり全学あげての取り組みがなされた。筆者は上級クラスの担  
当を依頼された。以下この講座の世代間交流でのかかわりあいの視点から述べて見よう。

##### 5.1 プロジェクトワーク

この学習活動は留学生達が、調査研究計画を立て、教室外で日本語を使いながらインタ  
ビューや資料・情報を集める作業を行い、発表を行う学習活動である。1998 年度はさくら  
組とうめ組の 2 クラスに分けた。さくら組のテーマは、川中島の合戦と武士道で武田信  
玄と上杉謙信の戦った川中島の古戦場へ出かけて取材した。また新渡戸稲造の英文「武士  
道」を読ませ発表させた。うめ組のテーマは長野市の交通事情で町へ出て一般市民が利用  
している交通手段に関するインタビューを行い、長野市を移動する際の外国人の助けにな  
るパンフレットを作成した。この活動を通して学生達はさまざまな世代の人たちの生の日  
本語に接する機会をもてたのである。

##### 5.2 大学の授業参加

1999 年には、二人のほぼ完全に日本語を駆使できる男子学生を迎えた。A 君と R 君であ  
る。彼ら 2 人の聴解発話力を伸ばすために T 助教授の家政学・家庭経済学の授業に参加さ  
せた。この授業は、日本人学生による発表を中心に討議・質疑応答形式のものであり、Y  
さんの「女性の歴史と家政学」F さんの「国際結婚と子供の人権」O さんの「育児休業法」M さ

んの「年金保険制度」など留学生にとって興味深いものであった。また、S 助教授のゼミナールに参加し、女子学生の司会によりそれぞれ英語で自己紹介を行い、次に日本語でアメリカの大学生生活と日本の大学生生活について、単位の取り方、遊び、読書、映画など広範囲な話題の話し合いを行い、日米両国の大学制度や学生気質の共通点や相違点などを日本人学生は直接知ることが出来たのである。このような people to people の交流によってこそ真の異文化理解を身につけることが出来るのである。

## 6. 世代間交流と外国語学習

### 6.1 実践的英語コミュニケーション講座

現在筆者は、工学部の T 教授を代表者とした English Workshop を毎週金曜日の夕方、大田国際交流会館で行っている。参加者は、日本人学生・留学生・社会人・大学教官・研究生などさまざまであり、年齢も 20 代から 70 代までにわたっている。英語を母語とする数人の若者を中心にそれぞれの英語運用能力を磨くことを目的とした世代間交流を行っている。ここでは、英語を通して老学生も若い学生も自分の人生を語り自分自身を語り自分の足元から自分の周りにいる外国人との直接的な触れ合いを通して国際的視野を養うべく努力しているのである。

### 6.2 英語聖書研究会

西欧文化の二大潮流はヘブライズムとヘレニズムである。前者は、神中心のユダヤ・キリスト教思想であり、後者は、人間中心のギリシャ思想である。日本人にとってヘレニズムは理解しやすいのであるが、厄介なのはヘブライズムである。信仰と言う非論理の世界と科学的合理主義と対峙する神を前提にした非合理主義世界観の理解である。また、儒教・仏教的文化フレームの土壌に馴染みがある日本人にとっては、ヘブライズムの世界は違和感を伴うものである。ヘブライ思想は、旧約・新約聖書に凝縮されておりこの研究こそは、西欧精神を理解する上で必須のものと言えよう。こうした見地から教育学部で戸隠村在住の D 氏を招いて毎週木曜日午後英語聖書研究を行っている。ここでも世代間交流となまの異文化衝突が行われている。

## 7. 世代間交流活動の哲学

人は人によってのみ人となるのである。せいぜい長く生きても 100 年ぐらいしか生きられない人にとって、この世界での生死はどのような意味をもっているのだろうか。この有限の生を意味あるものにするのは、自分が今置かれている場で精一杯生きるということに尽きよう。人は何人も生まれつきその人でなければ出来ないタレントを与えられている。このタレントを人のために使うことによって自己の生を充実したものにすることが出来るのである。人によってその大小はあろう。だが大事なものは人は何を信じどんな思想を持っていたかではなく何をこの世界でその生涯でしたかなのである。

まず自分が出来る小さな事から始める事である。若者は仕事を通して先輩から何が大事であるかを教わり、先輩は汗を流して後輩を教え導くことにより自らの人生を意味あるものにすることが出来るのである。この流汗悟道の精神は、世代間交流の柱である。

人は誰でも三つの履歴書をこの世界で書くのである。学歴・職歴・苦歴である。その中でもっとも人を人たらしめるものは、苦歴である。すなわち、その人がどのくらい苦しんだか、そして、自力でそれを自己のおかれた環境の中で克服してきたかと言うことである。このようにして人は自己の人格を高め磨き上げていく事が出来るのであり、自己の人生を完成出来るのである。世代間交流活動への参加は、なんびとにも自己練磨と人格形成の場を与えてくれるのである。

#### 【参考文献】

Atsuko Kusano (1998) Intergenerational Programs State University of New York

Elizabeth Kübler-Ross (1986) Death Simon & Schuster, Inc.

Kanzou Uchimura (1972) Representative Men of Japan Kyoubunkan

Lawrence S. Wrightsman (1988) Personality Development in Adulthood SAGE publications

Robert K. Greenleaf (1977) Servant Leadership Paulist Press

(2000年7月21日 受付)